

ローマ書13章1-7節 「キリスト者の社会生活」

1A 神からの權威 1-2

2A 悪に対する怒り 3-5

3A 納税の義務 6-7

本文

ローマ人への手紙 13 章を学んでいきます。私たちは、キリスト者の生活と実践の部分を読んでいます。12 章から始まる、自分自身を神に受け入れられる、生けるいけにえとして捧げなさいというところから、この世に調子を合わせず、思いの一新によって自分を変えなさいという教え。そして各々の与えられている神の恵みの賜物について、それを兄弟たちのために用いなさい、互いに仕えなさいということを教えています。

それから悪を自分に対して行なう者に対して、どのようにふるまうべきかについて、キリスト者として「善で報いなさい」というものです。これが、イエス様が私たちに命じられたことであり、迫害者に対しても祝福すべきであり、呪ってはいけないという戒めであります。そして、悪に対する報い、その正義と復讐は神に属するものであるから、神に任せなさいということです。自分の手で復讐をするのではなく、むしろ善を行なうことによって、神の怒りがその人に余計に表わされることになることを教えていました。もし私たちが悪に対して悪をもって報いたら、自分自身もその悪に加担することになります。そうすれば、処罰を受けてもそれは自分自身の悪のゆえであり、そこに何ら誇りはありません。しかし、もし善を行なっていたらどうでしょうか？ 神の訪れの日、裁きの日はその悪に対して私たちは申し開きをする必要はなくなります。ですから愛と赦しというのは、悪に屈することではなく、もっと積極的なことであることが分かります。

1A 神からの權威 1-2

1 人はみな、上に立つ權威に従うべきです。神によらない權威はなく、存在している權威はすべて、神によって立てられたものです。

13 章においてパウロは、神から悪に対する裁きを執行する權威が与えられている存在を紹介します。それが国であり、政府であります。正しい裁きを、神が終わりの日に行ってください。全ての悪に対する復讐をしてください。しかし、神はノアの時代の洪水の時、その後で新しくノアの家族から人々を増やされる時に、一つの掟を設けられました。「創世 9:5-6 わたしはあなたがたのいのちのためには、あなたがたの血の価を要求する。わたしはどんな獣にでも、それを要求する。また人にも、兄弟である者にも、人のいのちを要求する。人の血を流す者は、人によって、血を流される。神は人を神のかたちにお造りになったから。」アベルをカインが殺すという罪を犯し、

それからカインの子孫が暴力を称賛するほどになり、全ての者たちが悪に傾くのを神はご覧になって、人を造られたのを悔やまれました。それで水によって地に生きているものを全て消し去り、ノアの家族と箱舟に入った動物によって、再び増やし、地に満ちるようにされました。けれども、以前の秩序と異なって、人が人を殺した時には、その命を対価として支払うように、人に任せられました。つまり、死刑制度のことです。命は、神にしか取ることができないのですが、しかし神が、悪を抑制するために、人にその権限を任せられたのです。これが政府であります。

それで、神はイスラエルを立てられる時に、モーセを通して律法を与えられたが、裁判を執り行う者たちに定めを与えられました。そこに神のご性質の一つである正義と公正を示すために、人が犯した罪に対して、「目には目、歯には歯」という言葉があるように、その行なったことに対する公正な対価を求めるようにされています。例えば、盗みに対して殺人を犯した時と同じようには裁きません。また、殺人を犯しているのに盗みや虚偽の罪を犯したようには裁きません。

私たちは、ローマ 12 章にあるキリスト者の姿勢について学んでいて、それでここ 13 章にある神由来の権威についてないがしろにする傾向があります。例えば、「裁いてはいけない」というイエス様の言葉の真意を曲げて、あらゆる判断をしてはいけないとします。罪を犯して悔い改めない兄弟に対して、イエス様は異邦人のように取り扱いなさい、つまり教会から追放しなさいという命令をされているにも関わらず、「裁いてはいけない、とイエス様は言われた」と言って、そこだけを強調してしまいます。そして国が、刑法に即して人を罰します。また不法に侵略する外国の勢力に対して戦争という自衛手段に臨むばあいもあります。それらも全て、「神は赦しなさいと言われました」ということではないことを知らないといけません。

また、こんなこともあります。家庭内暴力で悩む、キリスト者の婦人が、「迫害に耐えないといけない」として、夫の心理的、物理的暴力に耐えていたということがあります。けれども、そのような窮状に対しては、本来なら、政府や自治体にある配偶者暴力相談支援センターに連絡を入れるで あるとか、あるいは、警察に直接、被害届を出さないといけません。夫を愛しているのであれば、むしろ夫自身が自分がどんなことをしているのか気づかせないといけないのです。このように、キリスト者が悪をもって善を行ないなさいという時に、社会的な制裁や、法的な処罰がなくなることを意味するのでは全くありません。

イエス様が直接、裁かれるのは、ご自身が再臨されて神の国を立てられてからです。その時には、国々は剣を取るのをやめ、イエス様の教えを学びます。「イザヤ 2:4 主は国々の間をさばき、多くの国々の民に、判決を下す。彼らはその剣を鋤に、その槍をかまに打ち直し、国は国に向かって剣を上げず、二度と戦いのことを習わない。」その時に、悪を行なう者はイエス様ご自身の鉄の杖によって、裁かれます。「黙示 19:15 この方の口からは諸国の民を打つために、鋭い剣が出ていた。この方は、鉄の杖をもって彼らを牧される。この方はまた、万物の支配者である神の激し

い怒りの酒ぶねを踏まれる。」ですから、神は最後に報いてくださるのですが、しかし、それまでは国々に対して剣を持つ権威を与えられて、悪を行なう者を裁くようにされています。

ですから私たちは自ずと、地上にある権威を敬うし、従うようになります。なぜなら、その源が神であることを知っているからです。「従う」あるいは「服従する」という言葉は、キリスト者の生活の特長となっています。これの元々の意味は、「下になるように整える」であり、軍隊の指令系統で使われる言葉です。つまり、権威の下に自分を置く、その命令に従うということです。第一に、私たちの主ご自身が父なる神に従われる方でありました(1コリント 15:28 等)。キリストを信じる時、それは信仰の従順、福音の言葉に服従したからに他なりません。そして、私たちが主にならう者たちとして、いろいろな場面において、従うことが特徴になっています。「エペソ 5:21 キリストを恐れ尊んで、互いに従いなさい。」とパウロは言いました。それで、妻が主に従うように夫に従いなさい、夫は自分の体のように妻を愛しなさい、と勧めています。それから、子供が主にあって親に従いなさい、親は主の教育と訓練によって育てなさい。そして奴隷は、キリストに従うように、真心から主人に従いなさい。主人も、奴隷に対して同じようにふるまいなさい、と勧めています。

それで、私たちは社会生活においても、従う者、その権威を敬う者として召されています。「テス 3:1 あなたは彼らに注意を与えて、支配者たちと権威者たちに服従し、従順で、すべての良いわざを進んでする者とならせなさい。」そして使徒ペテロも、教えました。「1ペテロ 2:13-17 人の立てたすべての制度に、主のゆえに従いなさい。それが主権者である王であっても、また、悪を行なう者を罰し、善を行なう者をほめるように王から遣わされた総督であっても、そうしなさい。というのは、善を行なって、愚かな人々の無知の口を封じることは、神のみこころだからです。あなたがたは自由人として行動しなさい。その自由を、悪の口実に用いないで、神の奴隷として用いなさい。すべての人を敬いなさい。兄弟たちを愛し、神を恐れ、王を尊びなさい。」このように、私たちは個人的に魂が救われることを願うだけでなく、社会生活の中でもキリスト者であることを証するように召されています。

そして、「神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。」と言っていますが、当時、パウロがこの手紙を書いている時のローマ、また使徒ペテロが手紙を書いた時のローマは、もちろん皇帝はキリスト者ではありませんでした。キリスト教の影響もありませんでした。むしろ、皇帝は神とされ、神の子、救い主、主と呼ばれていました。至るところに皇帝礼拝のための儀式があり、カエザルへの宮も建てられています。そしてパウロが手紙を書いた時の皇帝はネロです。彼こそが、キリスト者に対する迫害を開始したローマ皇帝です。したがって、政治指導者が信者ではない、また悪を行なっている横暴な指導者であっても、それでも敬って、従う姿勢を保つことを教えておられます。

私たちが知らないといけないのは、悪い勢力、悪魔や悪霊どもでさえ、神の主権、すなわち神

の許しがなければ存在できないということです。聖書の初めから終わりまで、悪魔や悪霊どもは、何かを行なう時に神の許しを得てそれを行なっていることが書かれています。ヨブ記における、サタンの神に対する申し出、またレギオンがイエス様に豚の中に入るように許しを願ったことなどが含まれます。したがって、「全世界は悪い者の支配下にあることを知っています。(1ヨハネ 5:19)」とありますが、しかし、同時に全ては神の支配の下にあると言えるのです。ですから、私たちは国において、それがサタンの影響を受けていると言えばそうであり、終わりの日には全ての国々が神とキリストに反抗して戦うことが預言されています。けれども、そうであっても、その中に神の許しがあるという主権があり、私たちはその権威を無視してはいけないということです。

2 したがって、権威に逆らっている人は、神の定めにとむいているのです。とむいた人は自分の身にさばきを招きます。

パウロはここで明確に、権威に逆らえば、神の定めを背くのであり、裁きは当然であると言っています。先日の恵比寿バイブルスタディで、ペテロ第一 2 章の学びでお話しましたが、これが、いかに当時のユダヤ人たちの考えとかけ離れていたかは、66 年から始まるユダヤ人反乱、70 年にエルサレムをローマが破壊せしめるユダヤ人による反乱が起こったことから良く分かります。ユダヤ教の中に、熱心党という民族主義者らがいて、彼らが反乱を主導しました。ユダヤ人の中には、ローマの圧政によって苦しんでいて、反ローマ感情はものすごく強かったのです。ローマが皇帝を神として、祭司とする異教社会であり、数々のローマやギリシヤの神々の宮が至るところにありました。その多神教の社会で、ユダヤ人は多神教を礼拝するのを強要されることを頑なに拒みました。しかしその結果、彼らは祖国を失い、世界に離散することになったのです。

しかし、キリスト者は使徒たちの教えに従って、ローマに対抗することはしませんでした。ローマの神々には仕えなかったし、皇帝を主と呼ぶことについても拒みましたが、その他、不道徳とされるものには参加しなかったため、迫害を受けました。けれども、不信者のユダヤ人たちのように、決して自分たちの信仰に反するからといって、反ローマの政治活動はしなかったのです。もししていたら、同じように、キリスト者たちをローマから追放、あるいは根絶されていたことでしょう。けれども、キリストに仕えていても、ローマに対抗している訳ではなかったため、捉えどころがなく、完全に弾圧できなかったのです。むしろ、ローマ社会にとって良いことを行っていったため、彼らを取り除く理由や根拠が次第になくなっていきました。そしてついに、皇帝自身がキリスト教徒になるに至るまでの影響力を持つのです。従うことによって、ローマの十字架を担がれたイエス様を示すことができ、それゆえに強力な証しとなったのです。

2A 悪に対する怒り 3-5

3 支配者を恐ろしいと思うのは、良い行ないをするときではなく、悪を行なうときです。権威を恐れたくないと思うなら、善を行ないなさい。そうすれば、支配者からほめられます。

これは、とても自然なことであります。私たちが以前いた宣教地で、友人が日本で出稼ぎに行ったことがある人でした。滞在期限が過ぎていたのに滞在していた、つまり不法滞在状態でありました。それで、お巡りさんが来る毎に怖くてしかたがなかったそうです。悪を行なっていれば、権威者は恐ろしい存在になってしまいます。けれども、しっかりと法に従っていれば、何も恐れることはありません。むしろ、善良な市民ということで評価を受けることになります。

キリスト者の間には、しばしば、自分たちのキリスト教の価値観に反するというので、政府に反対するような運動に関わっている人々があります。政府が自分たちを弾圧する人々であるということをも前提にして、反対します。しかし、それは間違いですね。政府は私たちの敵ではないのです、政府は次に出て来ますが、神の僕なのです。私たちが善を行なってさえいけば、ほめられることはあっても、私たちが恐怖に陥れることはないのです。ダニエル書にも、そのことはよく表れており、ダニエルにもダニエルの友人三人にも、ネブカデネザル王を恐れている様子は何一つありませんでした。また、ダニエルは獅子の穴に投げ込まれ、助け出された時に、王ダリヨスに対して、「王よ。私はあなたにも、何も悪いことをしていません。(6:2)」と言いました。

4 それは、彼があなたに益を与えるための、神のしもべだからです。しかし、もしあなたが悪を行なうなら、恐れなければなりません。彼は無意味に剣を帯びてはいないからです。彼は神のしもべであって、悪を行なう人には怒りをもって報います。

「彼があなたに益を与えるための、神のしもべ」とありますが、私たちキリスト者は、教会によって福音に奉仕する神のしもべであります。国に仕えている人々は、その世俗の領域において神に仕える人々であります。その人がキリスト者であるかないかに関わりなく、主がそこに立てておられる僕であります。「益を与えるための」とありますが、それは何でしょうか？悪を行なう者たちがはびこることです。つまり、平和と秩序が与えられるということです。パウロは同じことを、テモテ第一 2 章で言及しています。「2:1-2 そこで、まず初めに、このことを勧めます。すべての人のために、また王とすべての高い地位にある人たちのために願い、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしなさい。それは、私たちが敬虔に、また、威厳をもって、平安で静かな一生を過ごすためです。」次回、自分が走っている車が止められて、スピード違反で切符を切られる時に、私たちは神に感謝しないといけませんね。私たちに益を与えるための神の僕なのです。

そして、悪を行なう時には、剣がともなう怒り、報いがあるのだとあります。ローマ兵が剣を持っていたのは、別に人々を虐げるためではありません。そうではなく、反逆者に対して用いられるのであって、無意味に剣を帯びているのではないのです。警官が拳銃を携帯していますが、それは法律に従わず、誰かに危害を与える者に対して使用されるものです。私たちは、神によってその暴力の手段が任されていることを知り、敬い、従わないといけません。

ところで、「怒りをもって報います」という言葉ですが、「神の怒り」という言葉が聖書には数多く出て来ます。けれども、それが人間の使うような、怒りを爆発させるというようなものとは違います。ここにあるように、感情が伴うかもしれませんが、正義による報いを与えるというものを「神の怒り」と表現しています。私たちは旧約聖書の預言書で、数多くの剣を見ました。エルサレムに対しても主は剣をもって臨まれました。それは、アッシリヤであったり、バビロンであったりします。彼らの剣をも神は用いられて、エルサレムが罪を犯した時の罰を与えられたのです。神の怒りを現されました。しばしば、キリスト者の中でさえ、戦争そのものが絶対悪だとして、何でもかんでも悪いものであると決めつける傾向があります。しかし、主ご自身はそのような態度を取っておられません。剣が悪いか良いものかという尺度ではなく、剣を通してご自身の怒りを示されるということでもあります。

5 ですから、ただ怒りが恐ろしいからだけでなく、良心のためにも、従うべきです。

「良心のため」とありますが、これは 14 章に出て来る大切な教えです。良心とは、ローマ 2 章において、「律法をもたなくても、自分自身が自分に対する律法なのです。(14 節)」とあるように、私たちの心と霊に置かれた、善と悪を判断する物差しであります。14 章においては、肉を食べるかどうかという、信者によっても意見がわかる問題において、良心を清く保っていることの重要性が書かれています。そうした良心が、社会生活において、その権威を敬うことによって清く保たれているということです。ゆえに、信仰を働かせる者は自ずと権威に逆らわず、従う。法律には従う、善良な市民として生きることになります。

3A 納税の義務 6-7

6 同じ理由で、あなたがたは、みつぎを納めるのです。彼らは、いつもその務めに励んでいる神のしもべなのです。

納税の義務について、パウロは教え始めています。「同じ理由で」とありますが、彼らも同じように神に立てられた僕であり、その権威を敬い、従わないといけないということです。当時のローマ社会は、酷い重税でした。今の消費税、10 分になるという話は微々たるものになるような税金です。さらにユダヤ人は、宮への納入金を支払わなければなりません。反ローマ感情が、税金によって醸成されていました。ゆえに、取税人はユダヤ人に憎まれていたのです。そして、イエス様がユダヤ人の宗教指導者によって試されたことを思い出してください。「税金をカイザルに納めることは、律法にかなっていることでしょうか。かなっていないことでしょうか。(マタイ 22:17)」と尋ねました。それは、かなっていないと言えばローマに彼を引き渡せばいいだけですが、かなっているとすれば、ユダヤ人の反ローマ感情に触れることになり、彼らをイエスから引き離すことができます。

しかしイエス様は、納税をするかどうかということが中心的な議論になっていることを戒めました。

知恵をもって答えられました。デナリを持ってくるように言われて、そこにだれの肖像があるかを尋ねられました。「マタイ 22:21 彼らは、「カイザルのです。」と言った。そこで、イエスは言われた。「それなら、カイザルのものはカイザルに返しなさい。そして神のものは神に返しなさい。」」神に対して借りがあるのであり、神のものは神に返すことに集中しなさいということです。つまり、神の国とその義を第一にしなさいということです。そして、カイザルのものはカイザルにと言われて、それはそれで納めなさいと言われて、納税をすることについてもないがしろにはいけないことを教えられました。したがってキリスト者は、神に対して捧げる者でなければいけないし、またしっかりと、国や地方自治体に対しても納税する者でなければいけません。

7 あなたがたは、だれにでも義務を果たしなさい。みつぎを納めなければならない人にはみつぎを納め、税を納めなければならない人には税を納め、恐れなければならない人を恐れ、敬わなければならない人を敬いなさい。

上に立つ権威についてのまとめです。要は、「だれにでも義務を果たしなさい。」ということです。税についても、また剣を持つ権威者に対しても、また敬うべき人には敬意を示します。

このようにして、キリスト者の取るべき態度が書いてあります。次回詳しく学びますが、上の権威に従うその態度は、その権威に従属しているからではありません。誰に対しても借りがあってはならない、義務が生じるようなことがあってはならないという勧めがあります。つまり、私たちは誰にも強いられない自由人でなければいけないということです。しかし、互いに愛し合うことは別だとあります。愛が動機であり、その社会にいる人々と共に生きる、つまずかせない、そういった思いから権威に従うことによって一つになるということでもあります。私たちキリスト者は、二つの過ちを犯してしまいます。一つは、社会に関わらないことです。救いは各個人のものだから、社会については関係ないとする態度を取るからです。しかし、今見たように、社会に神の僕が立てられており、それだけで神は、社会に関心を持っておられることを知ります。もう一つは、反社会的になることです。社会は異教があるし、反キリスト的などころもあるかもしれません。なにしろ世であり、罪が満ちたところですから。けれども、それでも神がそこに折られることを信じて、その権威に従うのです。